

芳
新
集

三
編

849-1^濟

俳諧資料カ一ド

年代

1767未

編者
(筆者)

有昂

書名

芳新集 三編

備考

1767未

4.4.17

(下垣内蔵)

弘化丁未三編

俳話方新集



平安 五仲菴撰

序

自其先石... 弘化丁未... 俳話... 五仲菴撰

吳川河賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話〇八三三十一九九五番
〒737



ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...
ついでに... けしき...

平安

雲多居玉繩

朝もに... 群... 川の隈 山城 梅室
いふ... 故も... 稜の... 志白
是切... や... 止... 猫の... 築亭
廻廊... 常... 芳の... 茂... 馬印
洋... や... 誘... 早... 棠
小棠... 丹... 海... 一... 松雨
印... の... 友... 子... 松雨

初秋やひるまにさし風秋の光

晴るく離おそき水あつむり 芭蕉

物おし追ふ外一層は湖の上 草陽

山一ッ春もく尺せんり又月雲 赤穂

松竹屑の降中走るる急務が 舞水

いゝ万救るさくさく牡丹が 加らち

二日暮る櫓は城も徳りか 五雀

春をくく散支交るるさくさく 九起

初秋や水鳴や水の音春のそと 乙雅

秋もも春も故きをくもりや片山春 秋真女

眼は涙も光るる喜夏の望川が 梅仙

照るぬりもも飛ぶかき守扇が 松春

あやもたに杉屑もさるり子規 松節

つ松よもや月もゆるさるりな 常琴

ういゆも一ッおとせは離祭 祭負

油屋のつ芳しき甲と乳 杜鶴

十六宵や山振よく春を詠吟 芳美

蝶よくなまもや五月の雨の萩 梅通

高汐しかやそく電鼓小松系 若舎

水鏡立あそや虎唐の嘯こゑ 蒲雲

先一羽雀ん付りり初子の日 吳明

傾松よ軒を扇たそく月と栞 雨翠

ゆりぬぬ急よそかま木負家 孤柳

吹くくも砂のわめきや落原 梅石

和くす守鳴や峰よも池の里 木明

吹返す木の石を透て秋の風 岑明

ゆれ止めを春の音る浮葉家 即風

回つてを松の葉沈む清な家 仙步

くらくき石よ一坂くそく回るる家 豊凡

かえりくそく尺せりや虎の森の家 柏翠

羽子板乃くそく春やそく堀の内 芳水

くらくき山鏡を水まそく去る風 大翠

一つのみ扇のうしろの新葉のふ
 足濡るるき物のまをさやまのこ
 鉢の末の掬あうらせそめ茶の
 峯よまゆかろそめ茶の天の
 物よも物よも大やすき系
 松のうしろ一穂のうしろ松を記
 浮山めく産末の事や初る守
 答をよ戸さうしんてまの月
 号語
 石対
 岳風
 如柳
 響角
 重葉
 仙葉
 炎電

気をもあてやまやまの人の使
 物よもたまもるるまやうの
 地を掃く物よも松の柳の系
 つたの樹乃影も掃くまの葉か
 咲くまのまや地まのまの松の
 菊あまのまのまのまのまの
 晴たれまのまのまのまのまの
 香水
 水風
 三葉
 茂葉
 虚真
 曲洞
 有節

枝先を四り凍付てうめの急 横は 揚左

水物らんく抄ひあけたり桐一を 様兄

川花ささく岩のともやぶき水 五縁

急掛に華の影入る木槿糸 月桂

雲志んきいましくとらつや扇のり 祇白

おちを産る草の自由さや花の次 乙橋

一心抄のハキまことまや花の才 林哲

英名や産むまをる葉の白し 素彦

ふくまのまをる葉を、詞や小松也 松崎

おまを感へく抄をむ横うふ 小雀女

裡をわるぬく新原ふたをちふ 杜鵑

糸のひつそり志くう雲時雨 斑竹

木稚まことく産付ぬおらふが 菊英人

お舟屋の釣籠ゆつてく水草哉 柳夫

鶴たまくや鶴の本もあに葉の光 ナタ 宇居

了らひきせわとるるに提多舟
 舟なるしおれぬ岩わや細つら
 啼止まそそ笹垣くそそ水陸
 東のそそ我のそそ方か
 折力等し知れそそ女節そ
 人まわくそそや海邊そそ死
 そ節そそ長しや尸のそそわ
 親らそそふそそ身そそそそ
 冬 岐
 太乙
 よお女
 啼く
 節そ
 森久里
 退歩
 曲年

春そそそそそそそそそそ
 松風そそおそそ山乃そそあ
 そりそそ凡吐そそそそそそ
 地そそそそそそそそそそ
 又月向やあそそそそそそ
 菱村のそそそそそそそそ
 糖人
 葉魚
 及涯
 松翁
 一东
 素白

浮れそそ鳥のそそそそそそ
 金瓶

尺くさく梅より松る嵐つ 此方

雉子鳴や夕たかゝる白雲 此松

踏く尺る梅や梅折るる尚 麦雨

夕まに松のにむひや暮る也 五葉

日の入をわくしむおむ扇る 仲睦

昔おひに所寸のたき扇る 松玉

春ひるの梅も受おやうた梅 松好

昔や実るり所のあたまり 孤鳳

吹まへの幹よりやららら 月下

紀伊

吹あてる風もそやららら子 梅菊

梅を打音の中よりあきのも 世外

さし付る梅もそららら墓 英月

春の月乃今もららら梅花 若汀

尺梅ののぬるおや梨の系 巴曉

燃まらさら梅川の梅毎 琴風

初集や笈くら守殿のみ 秋葉

あふりあふり小春や女子のこゝろ

伊豆

遠水

山姥のあやうきあやふき

喜瓜

うつらと若も落し子規

まじき

移るかきかきくたえん松雪

名年

さみしげく若火く扱の夜高が

二仙

揺揺もくく出り初穂

眠馬

于葉のふゆきもはるのそよ声

玉舟

あやうきあやうき

あやうきあやうき

喜瓜

紙衣おそろたきささの白晴

有節

煮るあやうき牛乳をまに休を

瓜

こころす丸たきく唯高守おと

節

あやうき乃ちあふり月のこころ

瓜

あやうきあやうき寝ふさふさの蝶

節

吸筒あやうきあやうき新橋おと

瓜

わらわのれんまのしんげいもなきも

瓜

一本乃男松の庭の為くぬ

瓜

あゝ〜に日枝の物重菊あり

瓜

あゝ〜に心知のむすもつ可

瓜

あゝ〜にさきとを頼るも

瓜

あゝ〜に月よた〜れもつ福

瓜

あゝ〜に水木曳乃舟

瓜

権突の吹籠れぬ折髪ま

瓜

釣灯のま〜のまの心

瓜

わらわの獨居をぬもつらに

瓜

晴月また〜のまの面

瓜

絵のあも〜のまの菊臺

瓜

貼るや〜のまの袖引

瓜

舞力なき〜のまのをりて

瓜

存対む〜のまの増く

瓜

その〜に縁の付く〜のまの張

瓜

何をさうかゝるも後くぬ中 瓜

燗ひし少屋まきあく波の音 瓜

國乃大赦とまらふの音 瓜

採玉の富き中茶屋の音 瓜

竹より泣つく内庭の月 瓜

つまらぬや燗の糸乃人通り 瓜

地芋おろそぬ糸芋の音 瓜

箱貯り初に詔状の又り 瓜

めまひを不巧くやむ身の内 瓜

後り散りさくも音は皮の音 瓜

まゝの音さうぬやと音 瓜

々々音も好めし竹守の音 瓜

あそふか燗の音さきさま 瓜

一々音も掃せぬ福音州 近江 蕙逸

人乃音も乃を起す音守 砾山

川城まのせうそく水鳥のぬ 正印 米友

めりるり尾とあつたやけの秋 東谷

あけふ咲す子入やき丸のそ 省甫

名残のあて生流おとそやあはら 葛雨

あ仙やあけ知まぬおくれ咲 粟こ

遠近そく拾子あつたやけのそ 徳海

祝のりあつたあけむら子あ 彦岳

茶と酒そくあつたあけむら子あ 楓下

燭のそくあつたあけむら子あ 鳥羽種

あつたあけむら子あけむら子あ 眞玉

あつたあけむら子あけむら子あ 寛楊

あつたあけむら子あけむら子あ 梅月

あつたあけむら子あけむら子あ 松月

あつたあけむら子あけむら子あ 仙友

あつたあけむら子あけむら子あ 鶴山

あつたあけむら子あけむら子あ 樗谷

子の戸や塙のくしよもまらりく守 あは 二江

あやふふ花よやうらう花の元 花兄

今雨のそよそや杜の 花外

うらひやんぬの松をうらひ 若沙

いさよせむ張の絹やおあ枝 霞洲

地よ付ぬ花をうらひや 巳年市 楳和

あ切らせぬ花を仕掛や藩おら 知豆

あ雨のうらむおらうらむ 月坡

羊福く夫婦のやあやのうら 紫峰

城の園ふ花をうらむうらむ 誠之女

あうらや車乃あらのたえ水 杞柳

是元のあはけをうらむうらむ 流斑

羊からうらむうらむうらむ 玉童

人の聲身にまらり花の電 四許

花をうらむ花をうらむうらむ 出峰

あまのうらむうらむうらむ 山月

啼るるそそ雀のきくると面桂 鳥の 茶山

灯うつり影をそよ深きつ存 如風

風を流に何ゆましくお花や枯尾不 葦洲

山茶毒や散らふくさる第一等 秀茶

来列体を表してあそび新押 芋丈

夕ふおきとり影をまきくろ敷 伊勢守 子遷

刻くして舟より山あふ影を 一漢

臨み取守桂や影をの影の菊 五鈴

谷丸の岩に九たふそ敷きく 番安

うそ提出る来魂をわんをの巾 立安

眠気も守桂の影ひやそ影を 雅也

燈を消えたるそそやあのお 春愁

空をそ替へしめそつ野の物成 四日市 峻操

山境の火ふそそ影をそあお乳 切安

なごそそみのやうそそ業し小結及 霞汀

墨揮つてのひるめき 招板 示豊

白丸り乃よの伝る場や粟の花 山

若り羽もや遠いふよりしら 佳交

同ー叔と二のうやまの寸 種水

の成あはれしとくもや山 梅 カミ 寧馨

若付もぬ衣と折しの庭 イキ 徐如

つきとた寸待のひきや教さる 去川

一 おもく種もやと鳴く秋の音 好乐

吹れ舟もく暮るはさるる 竹川 琴静女

走り来りて甲より足濡す 荻みか 点雨

雪舟に切交のかさる 柳 山田 五叙

黄もや一足もも寸糸の邊 修巷

そくくもふも度粒ふ小粒ふ 琴雲

出おろけて梅福花や翠麓の角 玉岫

雪増とくつれうもや 白止

聖徳太子の御宇に於て利根鳴水鶴

山田 十四

香沢

よき風を御舟に吹かす御舟紙帳が

香舟

袖の巻拂ふて遠くはるのうた

胡蝶

鳴く御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

星の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

汐の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

たの御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

海苔と名や磯の御舟の御舟

青松

一村を御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

二三丁御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

佛田の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

宮木の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

尺の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

乃の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

高の御舟の御舟に御舟の御舟

舟楫

夕暮や鳥のささるる声

山田

梅西

若草の物も重く高乃玉

糸吉

武者の志似しくも世にうき

小清

春夕山よひもさうたえて少根礎

梅英

篝火くく押さるるまきり数ふあまが

関松

杖と竹と白ひきまきりやきり此是

香安

水の流や片増少くも作は是

南彦

未明く又一筆や木綿衣

米山

山下く又尺さ月や新しき

洪石

明ものあはに振る波や縁をさ

楠亭

掃のりく通るくち待時句成

松香

招ふみの外もあな天の川

松壺

里山にわおまふ山路や引板の音

柳染

晴くしれと服くく数ふき枯柳を

時飛

夕成つくもすく時菊のちめり

杞物

あゝそれほも外雨作ちりり危

桐一

いせ鯉よ一枝そひ川をさるれ
昌風

川サキ

料乃をみちるる山の花
東字

之日月の依る下りて端を經
鶴法

松風の流るる霧むや汐路
篤之

のさるる一樹乃を氣條や梅原
石鼎

木塚をた癒るえ詩をて茂るる
而石

尾張

華乃乃やあしとくまをり
黄山

さしたるる木花や枕の糸
其石

一寸の田中の山やうめの花
梅裡

粘りやうも向ぬ岩のこ
一清

掃りての影のまをせおちえ郊
半嶺

掃りぬれぬ山のやうに樹の花
鵬居

剣さるる小毎の雪や初り花出
黒馬

鳴りおにゆるる水鏡が
李岩

書物やひびく茶やん湯気
旭嶂

ほくしや誠りき田一枚

尾張

李隆

谷の名に呼ぶ村萩や梅の花

思文

山里や田舎を嘆の乃くし

市電

増なしくや何れを秘んはる山

島物

親おの西のまをけり梅の花

碧行

一秋これ山の夕の穂まが

栄城

山洞さちのさ村やまの秋

可軒

雪のまをよくは出や中祭

庶知

落付ぬ花のそよばや人通り

月庭

試り秋付ぬまをさるる人

有橋

雨のそよばやまをさるる人

微お女

秋のそよばやまをさるる人

芸里

雪のそよばやまをさるる人

鴻水

雪のそよばやまをさるる人

文之

淡西や雪のそよばやまをさるる人

三河

蓬宇

雪のそよばやまをさるる人

塞言

炭竈や煙入あふ二ととも

遠江

杜水

遠くくく扱乃のくき梅が

後河

目松

振出くく人らんくく雷ん

碧山

夜くくくく吹来風雨くく

岱亮

木危のくくくく或くく春の月

信濃

雷の表

なつか粥芥一毛のくくく

三坊里

荀菜や華結土穿りくく

木繩

朝粧くくくく刻波あり初袷

其旌

りを月小懐くく看くく去の浦

椀居

おの起をくくく降くく扱の菊

獨醒

一夜くくく初をくく保やくく雨

我栗

初冬やくくくりの出くく風くく

妻布

一唐くく他人くくく月

江戸

一具

朝くくくく寒くくく花の雲

若少

俳形小一をくく持くく妻乃雪

伯遠

訪ふ人をもたぬし海釣夕ぐれ 江戸 由松

青柳やりたたりて起て川を洗 為山

我府の故をみるに守り舟 守り舟 守月

尺返りて離まの程をよのり故 流其

手籠や一つら三舟の各法味 尺外

各州や小湫をさもつ所の内 得甚

入海に尺るの付し柳の家 百丈

さしとくす来よ燃り夫の電 守府

こなたをともく遠いやうをの水 抱儀

ひもとのくす黄葉にまを物かん 梅 梅笠

芽柳や素たふし神のこく 稻雲 稻雲

谷原を尺るをわと 安房 のわら 如 如是

切株より黄葉啼や 陸奥 山を 江 江之

あやま 龜 や及折控へ人乃り 龜年

松のをれさうりし 一 俣や 一 為求 一止

うめ ツカレ の 盛 花 夢 花 夢

川風を横切くゆくあり身ツカレ 社序

かふらうらめ美柿の小きふ 塘雨

照よぬ波よ音あり秋の浦 以才

障あるる雨く波河を枕の音 梅年

岸ゆくや一里是れを旅ゆく 浦山

蓬茅や根を垂直守あくる元出羽 清風

陽矣のまや戸口の第一詠 吳藍

涼よの知ゆるやまの鶯 二葉

是(翔)や秋のたゞしきなり 雪祥

夜ま風よ光のくくく夫の水 其枕

揺出さくやに清のたぢもや 雲光

みち候くさひく成や梅景 佳風

障ぬるる暮くをわく梅景

障ぬるる暮くをわく梅景戦后 春室

黄昏くをわく梅景 小洋

子規くくく雨乃登と事る 乙良

谷まある庭のうらむ夜の花 成ほ 春成

その都と病しる知や夢の宿 西晴

ちりりし群をまゝめて帰る 一花

菊葉と知ももやつ乃嘆けひ 竹生

静子帰や夢のれと上の桔槔 以逸

をらつや人まをを川岸通 守子

一亩やあすの華人の氣のり 清和

銀汁や地を入月の為のり 梧葉

彩よりんおく名月のまゝあが 越彦

西月や茶に汲減寸桶のぬ 阿水

西をえ難くくんき柳糸 花柳

月付るしつあを成やうり花 夕照

うらひまや情やあつあ人の音 六樹

水降しねきまうり危新の舟 白峰

湊當におり料理のおまが 皆村

花ちりし時をうらめけり押我子 眉公

夕版の坐方りそをなす玉用子

城后

色燈

替為るつるや清水の流文口

穂表

鳴るもあゝ水音や不古鳥

古巷

冬かきくさくさ木音や樺の声

汀柳

中庭や絶はるる原の景量

茶山

夜半の月気安く秋ぬ花盛

城中

窓分

一場の七葉一義言うる

子逆

おろろかよるをすも初鶴

松号

中もせはは掃くもつや物の色

不及

月丸きの月にきみよま清ぬが

茶園

折只のたうあらけり柿のふ

枕下

鐘の音れ吹きまらり舌の原

文友

茶女乃成りや袖は一色利

素人

地よりそ吹きぬぬけるの雪

嵐汐

二輪とる中よ代ぬりんが

花精

入まらるる出まらるる新茶が

逸江

をしまれく又吹雪なりか
城才 道雄

連翹やむきくも花の痛は
中道

つくもあそほのさむき
能也 竹塙

松の木の増を強うわ
福波

約字にわくもわす
東嶋

雪をふく黄毛なまぬ
龍史

櫻をたふさつと村
奇鼎

夕暮のふらぬ
鳳兮

此里の老よりあそ
梅の意 加賀 柳壺

田より持った
素玉

種舟より蒼水
季節

隙を成く湖のま
葛露

人々の夕度と
うら女

障土より
松尖

まつの花敷や
雅居

あつらひ
悠平

元波一の存もまきせはみ草摘加賀 大夢

葉のゆれは神を足り社若 晴江

欠乃に海岩を揺りて清水が 慈愛

似高きつとていふ一松さり 吐月

秋又を隙を結して去のぬ 北山

甲ふらそおあし一田つや揚や産 賀水

柴の屋を揺りてくまら雲あふ 常吟

裸木をうつらふるや炭俵 我柳

雨空をうて地をうた付すかまら 里坊

降侍をうたれと病あはれ春の鳥 松坡

かゝのそし時雨をうたすや産の猫 水園

七巻れ遠下廻りてくる子みぶら 丹嶽

秋乃権いのちをうたむる若按 水哉

采る鳥のあふく大地葉を 傲菊

ゆふも一日をうたむる 百首

ゆく秋や新あけの鶴の音も
但る 無着

鳥道や雪音たつきは椽先
花川

折もをるも喚もはのたの枝枯ぶ
丹波 九華

引けよおくれぬのんや物之在
大牟

藪入やま結るまよも能き
蓬句

是飛けのこも揚く下りそ煙子の声
雲帯

うしろのこも雪くおろすや店の籠
千丈

黄冬のおう花尺くくそ初音の風
香雪

火とけしこ登のひそし一枕の是
松島女

小くわりの余中してそまは汐子か
南崖

ふつあきこものや枝や福音丹后子
春節

折こもそ枝よと志しり唯の梅
可丈

大福やわらわの心種あたるとり
百難

風とそた折もそ取る柳の乳
勢河

登りこみあらしこもまゆりまの籠
十無

戸のまは八尾子振る大や月と栞
东柯

きんこくもや田原は為る月の 聖水

垣越と梢くく風そくわの楓 琴あり

滝の身も人も羽衣やそよの雪 黄雲

一日霞をそ集まつたより梅 史隆

夕風や急よおちつく峰の雪 経嶽

鶯の身もいつく揃ふるも葉が 梅土

梅のや垣より外を月何里 市風

五位詠の残る志下や昔は水 福丸

連鳴く折にかさや山の梅 布國

山ののびきよも在る変が 涼峰

船くく出く揃あり様葉も梅 香雨

有仙や木臼彫居る松の庭 赤嶺

山里も位よもそよの梅 素夷

字文はぬりてあらし神の枝 素外

棠のゆきも瑞くあらし梅 雲窠

是さくや西自憐のまのを愛 傳中 疎梅

招強くそんのさすや小松曳 春新

啼あとの雲を視くや時鳥 素坡

一掃うら木をみれく葉のふ 樵石

七子やにむひちもる盤のそく 如風

白羽を林なく葉も知く 伯著 杜陵

若く舟の先く返す花 大夢

服を掃をきくけきぬ 出雲 百年

竹を清くそ存のそくや 初雪 沙意

一掃くそくぬ柳のみより 終尾

中もせぬ若者の半より 尺山

名月や西をきく 崇和

是州は 淡路 梅亭

子細きき月 泉乐

久くさくは 蔭池

形子 遠く 付く 夕の 入雲 万々 後行 希康

照降 を得 雨く 梅の けき 光 芳之

夕立 にも 魚幣 あり 木の 影 月心

烟の けき 人 活け 梅乃 けき 留草

顔 あり 煙を かき 守と 人 遠壺

茶 葉の 袖く けき けき 梅池

あゝ けきの 声ハ 鳴る けき 可醜

そ 別れて 埃り けき や 蕃 茶城

一粒 けき 一あゝ けき 梅 梅庵

けき けき けき けき 梅 梅雨

一 梅 けき けき 梅 梅心

む けき けき けき 梅 南園

江の 名 けき けき けき 阿波 菊像

か けき けき けき けき 梅 梅文

膝 二つ 梅 けき けき 梅 在 一

さ けき けき けき けき 梅 愛象

辻店の灯もあきらめある柳系 化友

おのそよやりの出るまへの日本晴土佐 花佛

をいつそや服も八奈の付やまき伊豫 菅居

雀乃春もく白玉をくく時菊伊豫 映門

り結出くくたりに来ぬもく露 きく夜

在ぬくく一照もくやまの月 喜様

くくくくくくくくくくくくくくくく 小窓女

人りや店極の松よ人たぐり 葵笠

湯殿くく世ひ梅子やうたひ初 淡菟

飛鳥もくつうく結文もくくくく 鬼章

濡くくくくくくくくくくくくく 塔居

之の月の落くくくくくくく 竹外

ぬきくくくくくくくくくくく 卜水

黄毛のゆれも洗くくくくく 我卜

春もやわらやめりのたぐく 菊洲

くくくくくくくくくくく 棠人

人跡を中用より折や山つ

安藝

甘古

魚を主なる雲に降るや梅の雪

如山

あるの雪のうらや星の舟

雲曉

及摺乃をんくく清水

青鬼

葦の葉は松のうらゆるも楯

程春

言事や人の病はくく風の雪

木居

水降るあはせり雪も如珠の松

我獨

片枝て候とくくやとくも

連枝

晴や雪に凡ん降るくく子の雪

眠席

字却く摺火のおとや名茶後

知扇

ちきり親子の慈い初る雪

古徑

ふ小結ふあふれくぬあの新

氣抱

近きあくく凡んくあり谷の梅

清異

和おくや名茶通寸星の舟

千石

泉砂

むく雨の二物つれく初る

石見

馬角

梨々々や雪々々のこ乃雪のり 紫月

志々々々れ寝起や花々々々 伝州 花臺

雪よりしつらけり夕々々々 逸秋

白羽 伝州 白羽

雪をとり声々々々 伝州 梅葉

麻のそと紙迄ふ面々々の雪々々 くの女

負持つふ雪々々々を折々々の川 仙遊

塔の周々雪々々々休々々々 伝州 一笑

沈々々々々々 和歌 花檣 槐枝

瘦犬の起々々々 和歌 梅岳

中々々々々々 和歌 楚南

子規 伝州 龍玉

障々々々 和歌 金杖

械の考々々々 和歌 花溪

漱々々々 和歌 紫石

人馬 和歌 好静

東をまじい葉のくもせぬを子竹。 秋竹

英をまじい葉のくもせぬを子竹。 生水

英をまじい葉のくもせぬを子竹。 柏樹

英をまじい葉のくもせぬを子竹。 可合

英をまじい葉のくもせぬを子竹。 可合

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 荷子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 波回

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

梅咲て先の知まじい葉のくもせぬを子竹。 玄子

六月乃松をせられ一乳川 鉦成

名をまじい葉を隔て藪のけ 桐古

かまじい葉を隔て藪のけ 思合

くまじい葉を隔て藪のけ 大葉

あまじい葉を隔て藪のけ 佳峯

あまじい葉を隔て藪のけ 佳峯

扱もゆるゆるに喚ぶ梅の香 有言
かゝるゆるゆる出づる涼やかな枝 枕子
一の如くさるるひまらやまの條 孤存

嵐山清趣

有節

ゆくゑに秋のささるる集のいづれ
こゝろを浅きりりり山影 未明
苑訓一箇乃論の香を張く 即風

水枝持葉ひのつゝ春を春
氣をわくわく大障のぬ縁雨 即風
白の赤き乃や里双を赤一 風
晴真を晴も華若る月の秋 節
雪ららるるあふ大空の雪 即風
松の枝も踏あつて一躍 風
燈ふ春を村中りて守れ 節
吾たやせと紅雪とつ流 節

待くく居る心や歳責も身ぬ
竹の梢の麻の茂るに盡くす
ひもむ花つふたきる故柱
船こりて勢はあきりの回り道
抄さしつらき、春かゆきぬ
暮るるに空ちかす月途
暗しやうりて、鳴ぬ煙ひ若
秋も、物も元をあせぬお家集
風 明 暮 風 明 暮 風 明 暮

又十三年の春のゆき
雪あまの守る橋の横の敷く里
のこりに光る錦乃和ら華
人平島のあけりあふふ古簾
素直な医者と此の世話する
折角の地をよめあはれ栄えは
華しき金う、ゆきや桐花
から風も先松花を吹けりて
風 明 暮 風 明 暮 風 明 暮

裸木さるるの出も
 里ひりる候へて
 風を鏡を氣に
 声くくたふり
 戸を打雨のまき
 そり中をよく
 まくし干ぬ禪
 月の旅在系も
 杖と杖を
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく

孫あそむも
 返ひ詰り
 まの候
 之廿夫のめ
 併まて
 結更は
 一い
 法師の秘
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく
 風物ひく

何のそなたもなまの心かろの庭のあや
 湯をぬるまのまのくにひくも
 ぬるまのくにひくも
 庭人とんをふたのそなたの下
 夫もいまもささの東のそなた
 小百里もかゝるる花の落つ立
 衲乃たるまのそなたの味

Handwritten text in a cursive style, possibly a signature or a note, located vertically on the right page.

皇都四条通寺町東入南側
 蕉門御集冊摺物師 湖雲堂
 近江屋利助

